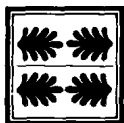


蘭を焼く 瀬戸内晴美





講談社文庫

蘭を焼く

瀬戸内晴美

昭和49年1月15日第1刷発行

昭和51年1月20日第2刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 3930

デザイン 亀倉雄策

製版 株式会社まゆら美研

印刷 豊国オフセット株式会社

製本 有限会社中沢製本

© Harumi Setouchi 1974

Printed in Japan

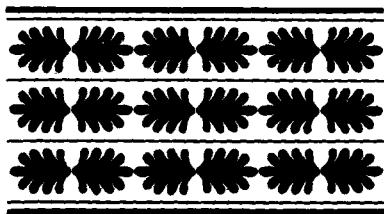
定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

〔社文庫〕

蘭を焼く

源氏内膳美



講談社

目次

蘭を焼く	七
公園にて	四九
予兆	七三
ブイヨンの煮えるまで	一〇七
うちうみ	一四三
樹の幻	一七七
さざなみ	三九
墓の見える道	二八二
解説	三三一
年譜	三三三

亀井秀雄

三三三	三三一	二八二	三九	一七七	一四三	一〇七	七三	四九	七
-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	----	----	---

蘭を焼く

若い篠竹のような薄緑の茎の先端から、三纏ほどの間隔をおいて互い違いについている紫色の花は、紐に繋がれた賑やかな鈴のように見える。佑子の中指くらいの太さの三本の茎は、花の重さに耐えられないのか、それぞれ添え竹を従えて、ありふれた藍色の陶器の鉢植の土から直上に延びていた。ひとつの花の大きさは、スイートピーぐらいだったし、花卉の肉も薄く、紫の色も淡かったが、群生しているせい、部屋のそのあたりだけ、隠し照明があてられているようにほのかな明るさが滲んでいる。花はひとつずつ開き方の度合いが違っていった。蓄んでいるのは、女の足の指のように見え、半開きは寝起きの女の唇を聯想させた。開ききって、花卉の先が外へ巻きこむほど反りかえっている花肉のなめらかな艶やかさは、女の腋の下や内股のほの暗い白さを想いおこさせる。色のせいか、形のせいか、その花は淫らなほどなまめかしい感じがする。花卉の一枚をよく見ると、スプーンのようにまるい窪みをもった根もとの方は、青味をたたえた薄黄色に滲み、扇型にひろがったあたりは、縁へゆくほど、濃い紫にばかし染めになっている。花卉の縁は、鋭利な鋏で作ったようなぎざぎざが刻みこまれていて、そのあたりは、紫というより、黒に近い濃さで縁どられていた。蕊は細い金の針を束ねたように、厳しい表情で花芯にしっかりととりついていて、花卉には静脈のような紫の筋が細かく走っている。

莖の丈が、四、五十糎もあるため、その鉢植の花は、飾り棚の上に置いてもおさまらず、テレビの上にも大きすぎ、結局、床にじかに置かれていたため、森戸規一が訪れる時、坐りつけている肘掛椅子の、丁度左肘のあたりに、花が群れ咲いている恰好になった。規一はさっきから、無意識に左手をのばしては、花を指先で突ついたり、花びらを挟んで、指の腹をすりあわせ、撫でさすったりしていたが、遂に八分ほど開いた花をひとつ、萼の根元から指先で捻り採ってしまった。花を栗色のテーブルの上に置いてから、それを捻り採ったことに気づいたらしく、改めて、花をつまみあげ、掌に載せてまじまじと見つめ直す。

規一に、花の名を訊かれても佑子には答えられない。

「蘭じゃない」

「蘭というのはわかるよ。だから何蘭かって訊いてるのだ」

「知らないのよ。それを呉れた人も知らないんですって、訊いてみたんだけど」

ちえつという表情で、規一はいきなり掌を口に押しあてた。口の中に投げこまれた花を、規一はむしやむしや噛みはじめ。みるまに規一の顔が渋面に歪んでいくのを見て、規一のコップに氷水を注いでやりながら佑子は訊く。

「どんな味」

「苦い」

途中で吐き出すものと思っていたのに、規一は、くつと、力んだ表情をして、唇をへの字に締めると、嚙み下してしまった。

「毒じゃないかしら。色が鮮かすぎる花は毒があるんですってよ」

規一は佑子の手許からコップを掴みとると、一気に八分ほどの水も嚙んでしまった。それでも、まだ咽喉にひっかかる感じなのか、片手を咽喉仏の上に押しつけ、首をのばし、けえっ、けえっと、咽喉を鳴らした。「消毒」と呟いて、今度はグラスに残っていたブランデーを一滴残さず呑みほしてしまふ。目の隅に涙がたまっている。佑子は規一の涙から時計に何度めかの視線を移した。規一の帰りをうながすいつもの時間は、もうとうに過ぎていた。それを告げなければと、佑子が規一の表情をうかがった時、規一は傾けたブランデーグラスの窪みにたまった濃い褐色の液体を、目の高さにあげて、その透明度を計るようにためつすがめつ見つめていた。佑子が口を開こうとするのを防ぐように、規一は、グラスを持った手をすっとおろし、いきなりついでばかりのブランデーを机上の灰皿にあけてしまった。

さっき、水差しの水を汲みに佑子が立った時、洗ってきたばかりなので、クリスタル硝子のその灰皿は、マツチ一本落ちていない。二十三枚の菊の花弁が広がったとも、太陽が焰をあげているとも見える型のその灰皿は、灰皿にしては重すぎ、置物としては軽すぎた。一点の曇りもない透明な硝子の厚い肉が、夜になると思いがけない灯の反射を見せ、プリズムのように七彩の虹をつくることも、踊る焰がとりまいてるように見えることもあった。前衛派の若い彫刻家の個展で、佑子が義理買いたものだけれど、置いてあるうちに目に馴染み、ようやくこの頃では、その光りや重さが気にならなくなってきている。注がれたブランデーは、思いがけない場所に落着きを失い、とまどい慌てて、中心のまるい浅い窪みに玉になって身を締め、盛りあがったが、そ

の勢いの反動で、次の瞬間には二十三枚の花弁の溝にむかつて一気に勢いよく走りこんでいった。無色透明だったクリスタルは、たちまち琥珀色に染めあげられると同時に、芳醇な匂いを放って、あたりの空気をゆらめかした。すると、それまで、感じていなかった蘭の匂いが急に鋭く際だち、ふたりの間に流れこんできた。

規一は、酔いのため赤い斑の浮いてきた顔を、ややうつむけたまま、片手をのばし、見もしないで蘭の花をまたひとつ揺り採ると、それを琥珀の花の中心の、黄金の池の中に投げ入れた。

「マッチ、すってごらん」

佑子は規一にいわれた通りにする。つづいて規一の目にうながされて、マッチの焰をブランデーに近づけていく。

「もう少し、下げて、もう少し」

規一の声に命令され、佑子の肘がのびきった時、ブランデーの表面にいつせいに焰が走る。ブランデーがさつき走ったときよりも、もっと速く、もっと軽く、焰はクリスタルの花弁の二十三枚の尖端までなめ尽し、紫色の薄絹のような光りを震わせ、しなやかに身を揉みしだく。風も音楽もない部屋で、透明な紫の焰はめらめらと踊りつづける。紫の照明に染められた全裸に見えるバレリーナたちの、むきたての葱のような無数の手が、闇にひらめいているように見える。やがてそれは大輪の菊でも踊り子の手でもなく、まだ発見されないでいる未知の大惑星のように見えてくる。佑子は立って部屋の灯という灯を消して歩く。暗闇になると、焰はいつそう透明さを増し、色は更に純度を高めた藤紫になる。焰の無数の舌が絶え間もなく揺れ踊っているのに、その

色は一点の赤みもまじえない。紫一色の焰はガスの焰の色にやや似ていながら、いっそう冷い感じがする。水に映った藤の花影のようなこの世ならぬ美しさで燃えつつける。

規一の顔にも焰が映えているけれど、それは頼までもとどかないため、闇の中に、黒いマスクをかけたように、鼻から下だけが薄紫の翳を持ち、白く浮び上っている。佑子の顔もそうだった。男と女の顎だけがふたつ、宙に浮いて、深夜ひっそりと花の火葬を見守っている。蘭は、自分と同じ色の焰にとり囲まれながら、身じろぎもしない。無限に長いようにも、この世のありとあらゆる物みながびたりと停止してしまつて、動きの止った映写幕の映像のようにも見える、不思議な時間がすぎ、焰は同じ速さでゆらめきつつけながら、ようやくいつせいに短くなり、ついで、幕を切つて落されたようなあつ気なさで、いきなり消えはてしまふ。

濃い闇の中に、佑子の重い吐息が流れる。まだ佑子の目の中に、ブランデーの燃える焰が踊りつづけていた。突然、短い音といっしよに、黄色い光りが闇に生れた。マツチの焰をかこつた規一の掌が、白く闇の中に写し出される。光りの輪の中に、少くなつたブランデーを窪みにためた灰皿があらわれ、その中心の琥珀色の水たまりの中に、蘭の花が、ほとんど投げこまれた時の姿のままに浮んでるのが見える。

「ほう、蘭は焼けないのか」

規一が感に耐えたような声を出す。佑子が、すぐ部屋の灯をつける。闇のまやかしに逢っているような気がしたからだつた。久しぶりにめぐりあつたような感じのする螢光灯のそっけない明るさは、あの紫の焰を見つめていた目には、妙に寒々と白けて映る。その灯に真上から照らさ

れ、やはり、蘭は焼けない姿をさらしていた。ブランデーに浸ったため、花びらの表面のアルコールだけが燃えて、花弁はかえって守られたのだらうなどと、規一が怪しげな推理を下す。まだ茎について息をつづけている花々にくらべると、火刑に逢った花はいくらか縮んだように見えるけれども、色も型も、ほとんど崩れていない。仔細に見ると、それでも濃紫の墨で縁どったような花のへりだけが、ちりちりに焦げていた。

佑子がはじめて蘭を採りあげてみる。蘭は指先に思いがけないぬくもりを伝えてくる。もう一方の手で灰皿に触れて見ると、それはもっこもった熱さをたたえていた。灯がついた瞬間、佑子はまた時計を見たが、火の燃えていた時間はほとんど一分とたつていなかったことを知る。蘭のぬくさは、血が通っているようで気味が悪い。指先で強くつまんでも、それは型も崩さなかった。

「愕いたねえ。火あぶりにあつても恬としてるんだからね。凄い花だ。まさかこうとは思わなかったよ」

気まぐれな思いつきの結果に、意外な収穫を得て、規一は、目に見えていきいきとした表情になった。更にまた何かを企んでいる時のように、目を若々しく輝かせてくる。規一が次に口を開く前に、それを言ってしまうないと、また言いそびれると思い、佑子は指の中の蘭を鼻に近づけながら、規一の顔を見ないで言う。

「そろそろ、もう……」

「わかつてる」

規一の苛立たしそうな声が、佑子の声を途中から奪う。規一の帰りをうながすのは、いつも決って佑子の方からだった。掌に入ってしまったような小さな目覚時計が、普段は佑子の部屋の壁際の飾り戸棚の上に置いてあったが、規一の来ている時は、その時計はふたりの場所につれて、佑子の手でこまめに移動させられた。今、時計は、ふたりが向きあっているティーテーブルの端に魔法瓶のかげから佑子の方に文字盤を向けている。佑子が、規一に帰りの時間が来ていることを独り言めいて呟く時、それは、こういう形でそこにあったり、次の間のベッドのヘッドボードの上に載っていたり、佑子が髪を掻きあげている鏡台の化粧品瓶や香水瓶の中に、まぎれこみ顔に置かれていたりした。佑子のうながしを聞くと、「わかつてる」と、彼は必ず鸚鵡返しに皆までいわず答え、視線は佑子に向けたまま、片手を正確にのぼし、時計を一握みにすると、自分の方へ向き直らせてから、す速い一瞥で時間を確かめ、いつそうまた、話の続きに身をいれたふりをして、声に力をこめるのだった。その時は、時計はふたりの視線から等分に見える位置に、きちんと置き直されていた。

そうやってからの時計の針の進みは、急に歩みを鈍らせ、まるで動くのを怠けているように佑子の目には映ってくる。ところが規一にはそのあたりから、時間が活潑な速脚になり、気忙しげな前かがみで、小走りに動きはじめると思えるらしかった。何か喋るかするかしないと、時間に追いつけないように、規一の態度は落着きなくせわしなくなる。規一が佑子の部屋を訪れるようになりはじめの頃は、入ってくるなり、自分でドアの方へ向き直り、しっかり鍵を掛けた瞬間、和んだ表情になって、まるでもう、永久にこの部屋に居つづけそうな落着きと、氣くつろぎを見

せた。そのくせ、夜が更け進み、ふたりの時間に溺れきって、佑子がつい時間を忘れきってしまった頃、規一はいきなり唐突に起き上って、「帰る」と、有無を言わさない短さで言い放ち、あつ氣に取られたような手速さで、てきぱき身支度をしてしまうのだった。それがいつか一年たち、二年すぎる頃から、規一は、部屋に入って来て後手にドアの鍵を締め、佑子の顔を見るなり、にこりともしないで、

「今日は××時までしかいられないよ」

と、断定的に言いいきり、佑子が訊きもしないのに、その理由としてのつびきならない用事を矢つぎ早に並べたてて説明し、ようやく例の肘掛椅子にほっとしたように腰を落ちつけるのだった。それでいて、自分の宣言した時刻がきても、そんなことを言ったのをまるで忘れきっているかのように、殊更にその時をやり過ごしてしまう。そればかりか、結局は佑子がうながさなければならぬ深夜のぎりぎりの時間を迎えてしまうのだった。

焼かれた蘭は、ブランドーの匂いと、蘭自身の甘酸っぱい匂いのまざりあつたこげ臭さがほのかにしていた。佑子が嗅いでいる花を規一がとりあげ、自分の鼻に近づけた。目を閉じ、鼻をくつくつと鳴らしてみても、規一は目をあけないまゝだった。

「この蘭の焦げ臭い匂い、よく似てるよ」

佑子は咽喉の奥をかすかに鳴らせて笑い、規一のことばの意味を理解したことを示す。

蘭をもとのブランドーの中にもどすと、規一は椅子の上にあぐらを組み直し、背までしゃんと伸して、また呑み直しの態勢を示す。慌しく駆けめぐり、規一を急がせる時間に対して、不貞腐

れてみせるように、規一は瓶に残っている酒の一滴まで呑み尽そうという意気込みを改めて見せはじめた。話し声が、時間の足音を掻き消すとも思うのか、佑子に無理強いに話させるか、自分からとめどもない話をしはじめるのも、こんな時間だった。

「あの額、また歪んでる」

規一が佑子の頭越しに佑子の背後の壁を見上げて額を突きあげる。佑子は首をねじ曲げて、彼のしている壁の方へ目をあげる。亡くなった夫も、夫の友人だった別れた恋人も、絵描きだった関係から、佑子の手許には、絵が多い。そのどれを掛け替えても、規一はちらっと白眼を多くして一瞥するだけで、ほめたこともけなしたこともない。その癖、時折、思いがけない唐突さで右が下っているとか、左が上っているとか言い出すのだった。ほとんど目立たない額の歪みを、佑子が首をかしげて見定めていると

「早く直しなさい、右をあげるんだ」

と、規一の声が神経質に飛んでくる。

「上りすぎた。もう少し下げて。何だ、下りすぎじゃないか。本気で直しなさい。よし、それでいい」

直った額を見つめながら、佑子は、額は最初から歪んでなんかいなかったのではないかと思う。

「思いだした……」

規一が、咽喉元まで出かかっていて、そこにもつれていた記憶の糸口をようやく掴んだという